



時は 2042 年、理夢華 22 歳の時であった。

地球温暖化によって南極の氷が溶け、そこからアトランティス遺跡が発見されたという噂が立った。そこで理夢華は AI 搭載型小型ドローン『テセウス』を作成した。

『テセウス』には、ラーニングによって戦国時代の軍師や武将などの能力が付与された。

理夢華

「仮想空間でのシミュレーションによる学習は終わったわ」

奈美

「これで人工知能による自動飛行が可能になるのね」

理夢華

「そうよ。AI 搭載型小型ドローン・テセウスの冒険のはじまりよ！」

早速、テセウスを飛ばすことにした。それと同時に理夢華のパーソナル AI アリアドネも起動させる。アリアドネはテセウスから送られてくるあらゆるデータに対して様々な処理を行い、テセウスがルートを選択する時のサポートを行う。

理夢華

「いきなりステルスモードにして、あらゆるレーダーに察知されないようにするの」

奈美

「こんなに小さいのに、色々な機能があってすごいわね」

理夢華

「日本からオーストラリアを経て、南極に向かうわ」

奈美

「最短ルートを通るってわけね」

理夢華

「最短と言ってもかなり時間かかっちゃうけどね。途中でエネルギーが切れそうになったら、海の上で太陽光充電して、再び飛行開始って感じよ」

「あと、水上走行や潜水も可能なの」

奈美

「すごいわね」

「で、どれくらいかかるの？目的地まで」

理夢華

「シミュレーションでは 15 日って出た」

奈美

「ああ、それくらいでいけちゃうのね」

理夢華

「最近のドローンは結構スピードも出るのよ」

AI 搭載ドローンは何日も飛行と停止・充電を繰り返し、シミュレーション通りに 15 日後に、テセウスは南極大陸へとたどり着いた。

理夢華



「奈美、待ってたわよ。いよいよ、テセウスが南極大陸に入ったから、奈美が来るまで待機してたわ」

奈美

「ありがとう、理夢華 w」

理夢華

「では、早速、いくわよ」

奈美

「温暖化と言っても、まだ氷に閉ざされている部分もあって寒そうね」

理夢華

「そうね」

奈美

「で、遺跡はどこにあるのかしら」

理夢華

「搭載している最新式超小型量子レーダーに何か反応があるの。その場所に行こうと思う」

奈美

「なんか凄そうなのが色々つついているのね」

理夢華

「このレーダーは量子レベルのかなり細かい信号までキャッチできるんだけど、ある場所から変わった信号が検出されているの」

奈美

「そこだけ変わった信号ってことは何か怪しいわね w」

理夢華

「そうなのよ」

その場所にいくと、明らかに量子レーダーが様々な反応を示す。

テセウス

「地球上のものとは思えないような反応あり」

奈美

「あれ？このコ、話すの？」

理夢華

「そうよ。必要以上のことはあまり話さないけど」

理夢華は LiDAR（ライダー）からカメラ映像へ切り替えた。

奈美

「なにこれ・・・」

理夢華

「これが、アトランティス・・・」

海から真っ直ぐに運河のようなものが伸びており、その先にマンダラやストーンヘンジを思わせるように超巨大なサークルが氷の下に存在することが、テセウスの映像から映し出された。



円は中央から数えて7つあり、放射状に広がっている。そして、中心の円に向かって八つの道のようなものが見える。

奈美

「外側の壁は少し燻んだ金属のような壁でできているけど、中央は・・・、何あれ・・・」

理夢華

「光り輝いているわね・・・」

テセウス

「プラトンの文献を参考にするなら、外側は銅、内側はオリハルコンだ」

奈美

「オリハルコンって、よくファンタジーに出てくる伝説の金属？」

理夢華

「単なる真鍮（しんちゅう）にも見えるけど、どうなのかしら」

テセウス

「採取すればわかるが、見つかる可能性が高い」

理夢華はテセウスの基本プログラムに「人間と機械に見つからないようにせよ」というものを入力している。

テセウス

「レーダーによると、人間らしき動きがあり、氷を削って遺跡内部に侵入していると思われる」

理夢華

「既に発掘調査は開始されているのね」

奈美

「じゃ、内部は見れないのね」

テセウス

「夜になれば人が減る、もしくははいないと思われるから可能だ」

理夢華

「そうね、とりあえずここまでとして、夜、人の動きがなくなったのを確認してから潜入しましょう」

「奈美、今日、うちに泊まっていかない？」

奈美

「そうね、そうするわw」

そして夜になった。

テセウス

「内部から人の動きが消えた」

理夢華

「今日の発掘調査が終わったようね」

「じゃあ、潜入開始しましょう」

奈美

「楽しみねw」



昼間にテセウスは、遺跡の量子スキャンニングをしていた。そのデータに基づいて、アリアドネも協力して潜入ルートを探る。

潜入は、中央の水路からすることとした。その水路は氷で閉ざされているが、人の手によって氷のトンネルが掘られている。

氷のトンネルには至るところに赤外線センサーがあり、テセウスはステルスモードのレベルを最高にして、それらを全てすり抜けてゆく。

テセウス

「反応あり」

奈美

「きゃ、人が凍ってるの？しかも、凄い大きな人・・・」

トンネルの左右には人らしきものがちらほら見える。

理夢華

「人とは思えないような大きさね」

奈美

「そうね、画像からだと比較するものがないからよくわからないけど・・・」

理夢華

「テセウス、その人らしきものの身長を計測して」

テセウス

「約 2.7 メートル。人と思われる」

奈美

「2.7 メートル？そんなに大きな人いるの？」

理夢華

「わからないわ。古代人は巨人だったのかも」

更によくみると人以外の恐竜らしき生物も見える。

奈美

「これは恐竜？これはいつの時代のものなの・・・」

理夢華

「そうね、恐竜に見えるし、ファンタジーの世界のドラゴンにも見えるわ」

テセウス

「恐竜とは少し違う」

理夢華

「とりあえず自動録画モードになっているから、後で映像を解析してみるわ」

更に進んでいくと更に大きな人や、身長 1 メートルにも満たない小人のような生体も存在する。

奈美

「小人や巨人、ドラゴン・・・。何かおとぎ話の世界みたいね・・・」

理夢華



「とりあえず、古代には、私たちとは少し違う生体が存在したってことね」

そして、いよいよ遺跡の中央に迫った。

理夢華

「・・・ここからね」

奈美

「・・・そうね」

テセウス

「この金属からは特殊な波動が検出されます」

理夢華

「テセウス、その金属を採取できる？」

テセウス

「気づかれる可能性があるので不可能」

理夢華

「じゃあ、その波形を記録して」

テセウス

「金属から放出される波動の波形を記録」

理夢華

「・・・そのまま奥へ行って」

テセウス

「了解」

奈美

「・・・いよいよ中心部ね。何かあるのかしら」

更に奥へ進むと大きな掘り進められた空間があり、何かが浮遊している。

奈美

「これは何なの・・・」

理夢華

「石が浮いているように見えるけど・・・」

テセウス

「この石は浮いている。動力は不明。先ほどの金属の波動と類似している」

理夢華

「・・・それも記録して」

テセウス

「この石から放出される波形も記録」

更に奥へと向かう。

奈美

「これは・・・。氷の中に人？像？」

理夢華

「原型を完全にとどめている人に見えるけど・・・」



大きな氷柱の中に、髪の毛は蒼く、肌は白く、鎧を装着し、剣を片手に持つ、美しい男性が、まるで生きているかのように氷結され、冷凍保存されていた。

テセウス

「画像解析からは人の可能性が高い。性別は男性。かなり古い時代のものだ」

奈美

「・・・それにしても、美しい男性だわね」

理夢華

「これがあの先生が言ってた“海神王子”なのかしら」

奈美

「かもしれないわね・・・」

テセウス

「更に奥には、また別の反応あり。しかし、進路は閉ざされており、これ以上の進行は不可能である」

理夢華

「・・・ここまでね。テセウス、ありがとう。そこからステルスモード継続で、ホームまで帰還して」

テセウス

「了解」

理夢華

「奈美、おつかれさま。今日はもう寝ましょ。明日は学校も休みだし、ゆっくりしていけばいいわ」

奈美

「何かもう刺激的だったわ！ドキドキして寝れないかも w」

と言いつつ、既に深夜となっていたため、二人はすぐに眠りの世界へと旅立つのであった。